九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

イギリスの学校評価における教職員団体の役割

坂本, 真由美
九州大学大学院人間環境学研究科人間環境学研究院 : 助手 : 比較国際教育学

https://doi.org/10.15017/982

出版情報：大学院教育学研究紀要. 3, pp.151-162, 2001-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2000，第3号(通巻第46集)，151-162
Res. Bull. Education, Kyushu U., 2000, Vol.3, 151-162

イギリスの学校評価における教職員団体の役割

坂　本　真由美

はじめに

イギリス（ここではイングランドとウェールズに限定）では1839年以来，勅任視察官（Her Majesty's Inspector，以下 HMI）による学校視察が発展してきた国であるが，1992年，HMI から教育水準局（Office for Standard in Education，以下 OFSTED）に全国の公立学校の視察の権限が与えられてからは，その特質が，学校へのサポートから「良い学校か悪い学校か」を見極める手段として監査的，査察的になってきている。OFSTED の学校視察で特に改善が必要な悪い学校と評価された学校や教師は，「失敗学校（failing school)」，「失敗教師（failing teacher)」というレッテルが貼られ，今年，OFSTED の学校視察の授業観察において点数を低くつけられた教師が自殺した事件が物語っているように，その監査の厳しさは，学校ばかりでなく教師自身にも影響してきている[1]。

各地域の教育提供の権限をもっていた地方教育当局（Local Education Authority，以下 LEA）や学校視察に対し中央政府の介入がまだ緩やかであったころは，教師の専門性は尊重されていたといえるが，教育の水準向上を目指した1988年のナショナル・カリキュラムや OFSTED の学校視察の導入政策による教育に対する著しい中央政府の介入は，学校や教師の周りで新たな状況を生じさせ，教師は自らもっている教職の専門性に危機を感じ始めている。このように学校や教師が「監査」されるイギリスにおいて，苦悩する教師を前に，教師を守るべき立場にある教職員団体はいかなる反応を見せているのであろうか。

イギリスには，最大の組織率を誇る全国教職員組合（National Union of Teachers，以下 NUT）をはじめ，全国校長協会（National Association of Headteachers，NAHT)，全国男性教師協会および女性教師組合(National Association of Schoolmasters/Union of Women Teachers，NAS/UWT)，教員と講師の協会（Association of Teachers and Lecturers，ATL）等，数種の教職員団体が存在するが，特に NUT は，HMI の学校視察から OFSTED の学校視察に至るまで，学校視察に対する組合の反応を示す報告書を提出し続けてきた。

そこで本論では，主に NUT の報告書を参考に，1992年の OFSTED の学校視察の導入以前の HMI による学校視察から OFSTED の学校視察にいたるまで，教職員団体がいかなる反応を示しているのかを検討し，学校視察による学校評価制度下において，教職員団体はどのような役割を果たす必要性があるのかを考察する。

1．HMI の学校視察に対する教職員団体の反応

1960年代から80年代にいたる HMI の学校視察は，視察官が学校を訪問し，学校の名を出さずに報告書を書くというのものであり，視察官は特定の地域で採用され，報告書は特定の学校の校長，LEA，主任視察官（Chief Inspector）に送られた。視察官に対する中央政府のインパクトはほとんどなく，一部カリスマのような視察官が登場し，彼らの認めるよい学校実践がモデル化された時代もあったほどである[2]。1970年代頃から，HMI の学校視察は一部の学校で行われ，LEA の学校視察が主流になったが，1980年代に至っても，HMI の学校視察報告書は中央政府や学校に尊重され，HMI の地位はゆるぎないものがあった。例えば，1979年に教育科学省（Department of Education and Science，DES）が出した『イングランドの初等教育：HMI による調査』に対する NUT の反応を見てみると，「組合は，この調査が多くの神話を消滅させ，この国の初等教育の状態に関する一般の不安を和らげてくれたことを歓迎する（中略）特に初等学校の教師が，生徒が行動や読書算がうまくできるように懸命に努力していることや，教師が一人一人の生徒，特に学習困難な生徒に対し関心をもっているということを認識してくれたことを歓迎する」[3]と述べ，教師の教育活動に対する HMI の評価に好感を示している。また，NUT は同報告書において，「組合は，狭義のカリキュラムは生徒の基本スキルをより発達させるという証拠がない，とした視察官の発見を心より支援する（中略）組合は教師によって選択された初等教育カリキュラムが個人のニーズと地方のニーズに適するようにコミットメントしていることを再び肯定したい。組合は，いかなる中央のコントロール，教科を基礎としたカリキュラムの傾向を拒否し，教師と子どもの密接な個人的な関係の強さに則った初等カリキュラムの現在の自立性と柔軟性が維持されることを望む」[4]と述べており，そこには，教師の専門性に対する自信の程が伺われる。

教師の専門性については，当時の HMI は教師個人の長所を基礎としたスタッフ開発を求めているが，それに対して NUT は，教師，校長，LEA と訓練機関との共同責任や，初等教育の発展と改善には一般市民，親，NUT 代表者が提供の手段となると表明するとともに[6]，HMI の報告書は教師と政府との行動プログラムへの可能性に対して健全で生産的な議論を促進しているとみなしている[6]。このように，NUT は HMI の指摘を受け止め，その報告書が中央政府と学校の仲介役を果たすと期待しているのである。

しかし，1980年代後半にイギリスが経済危機を迎え，政府がその対策に教育の水準向上政策を押し出すにつれ，HMI の学校視察に対する批判が高まってくる。それは主に HMI の明確な基準のない視察方法や報告書に対して向けられた。例えば，Williamson は，1979年から1985年にかけて行われた HMI による10数校の初等学校の調査に対して，「HMI の報告書は個人の観察の要約であり，明確に述べられていない基準で学校を評価している（中略）その調査は初等教育に限られ，中等教育を含めていない（中略）全体的な教育システムを見るのに HMI の調査を使うのは不可能である」[7]と批判している。HMI が明確な視察基準の策定になかなか着手しない理由としては，Ebbutt は (1)学校の質を区別するには経験から得る暗黙の賢明さが必要であるが，その賢明さが十分に明確にでき

ないこと，(2) HMI が所有する判断の権限，地位，正統的な国家的役割と専門性が基準の策定を暗黙に妨げていること，(3)学校側が HMI が何をチェックするかあらかじめ知っているので，学校側にとって魅力的な視察報告書が出版されることを挙げている[8]。しかし，HMI の学校視察が失力していった直接的な理由は，政府の教育の水準向上政策に HMI の学校視察が貢献できないと中央政府が事実上見切りをつけたことである。こうして教育大臣 Kenneth Clark は，教育の水準向上に寄与する明確な基準をもった新しい学校視察制度の確立を公約し，OFSTED の学校視察の導入へと至ることになる。

しかしながら，HMI に対する批判とともに学校側の HMI に対する敬意の念が失われていったわけではない。ALT に所属するある教師は，「私は HMI の熱意のある視察によっていつもリフレッシュできた。HMI の視察は LEA の視察よりも信頼性がある。HMI は訓練された専門家であり，常に子ども達に対して深い責任感を示してきたが，もはや孤独であり，子ども達を救う力を失ってしまった」と，教育の水準向上政策の促進の元，その消え行く姿を惜しんでいる[9]。

このように，HMI の学校視察に対して NUT をはじめとする教職員団体の反応からは，視察の方法の問題に対する批判を超えた高い信頼度が伺えるのであるが，では，新しい OFSTED の学校視察制度に対して教職員団体，特に NUT はどのような反応を示しているのか，次の項で検討することにする。

2．OFSTED の学校視察に対する教職員団体の反応

OFSTED の学校視察が HMI の学校視察と大きく異なることは，視察の枠組みが明確に体系化されていることである。その枠組みはハンドブックとして出版され，学校側はそれをもとに視察の準備が可能となっている。まず，OFSTED の学校視察では全国の公立学校が対象で，OFSTED が定める視察基準があり，一般市民から募集した素人視察官を含む視察チームが４，５日間にわたって視察を行い，学校名を出した報告書が一般公開される。学校は視察の前に，多くの学校のデータを書類として提出し，学校は視察で指摘された問題点に対し明確に改善計画を立て OFSTED の提出しなければならない。この学校視察は1992年に法的に認められ，４年サイクルで始まったが，現在では，６年サイクルのものもあり，短期・長期の学校視察が使い分けられている。

NUT は1994年に，1993年の秋学期までに OFSTED の学校視察を終えた380校を調査し，その反応を20項目にわたって報告しているが，その中で示された教師らの反応を概要すると，不安と余分な作業が増え，余分な仕事については価値がない，視察チームがフレームワークに則ったプロセスを確実に踏んでおらずチームによって異なる，視察前の会議がなかったかもしくは学校側の発言が認められなかった，「満足」という評価用語は質の測定に適していない，視察報告書に処罰的・否定的な記述が多くバランスがとれていない，学校の実践内容が十分に伝えられていない，親に対して詳細な学校の様子が伝えられていない，報告書は学校が視察の基準に見合ったリソースを提供していることを事例を挙げて記述すべきなど，視察の枠組みと方法に対する問題点の指摘が多く見ら

れた。しかしながら，視察によって学校が注目しなければならない側面が見えた，LEA や他のスタッフがサポート的だった，学校の自己評価の援助になる，OFSTED の学校視察は長期的な積極的なプロセスであり，学校経営の改善とアカウンタビリティに応える要素となりうる，というように，OFSTED の学校視察が，学校内外に対して利点があるという期待を示す意見も含まれていた[10]。ただし，この報告書で見られる特徴は，OFSTED の学校視察に対して肯定的な見方をしていた意見の多くは，校長や国庫補助学校の教師の反応であり，一般校の教師には否定的な意見が多く見られたことである。その理由には，視察官と生徒との会話が不十分だった，ただ歩き回るだけで授業妨害になった，教師に対して偏見をもち感受性が不足していた，視察官の教科の専門性が不足していた，経験の少ない教師に対して過度の観察がなされたなど，授業観察における視察官の力量不足に教師らが不満を示していることが挙げられる[11]。

しかしながら，この時点で，NUT の OFSTED の学校視察に対する反応には，まだ積極的な否定という傾向は見られない。むしろ報告書が出された翌年の1995年の NUT のジャーナルで，NUT は OFSTED の学校視察の枠組みを歓迎することを表明している[12]。

ところが，1250人の校長・教頭を対象にした1998年の報告書『OFSTED-NUT の校長・教頭の見解』では，(1)視察は学校改善を直接に導かない，(2)視察のプレッシャーは教師と学校の満足だけでは克服できない，(3)視察は援助的でも動機付けにもならない，(4)視察は分裂的で専制的である[13]というように OFSTED の学校視察に対する NUT 組合員の強い反感が大きく浮き彫りになっている。このような変化には何が起因しているのであろうか。

それは，特に，OFSTED の学校視察による「失敗学校（failing school）」と「失敗教師（failing teacher）」の選別が大きく影響していると思われる。OFSTED の最高責任者である主任視察官 Woodhead は，1996年に約15000人の教師が「失敗教師」であると推定したが，彼の失敗教師を学校から排除する意向は明確である。Woodhead は無能な教師の存在は都市部の低い収入や貧しい子ども達をもつシステムの失敗というよりはむしろ個々の教師の特徴としての劣った授業にあるということを強調した[14]。このことは，OFSTED が学校の長所短所よりも個々の教師をターゲットとし，それを評価（rating）することに焦点が向かっていることを意味しているといえよう。Woodhead は1996年『OFSTED とその批判』の中で，OFSTED の全ての意義は授業に対し高度な動機付けをさせ，高度な質の授業力をもたせることであるとし，OFSTED に批判が集中する実際の問題は，OFSTED が消費者に権限を与える政府の機関であるということが受け入れられていないことであると述べている[15]。つまり，OFSTED はあくまでも消費者側に立ち，彼らが満足いく利益を得るために，学校や教師を選別するのは正当であるという立場を Woodhead はより強く強調したのである。

このような OFSTED の教師を選別する正当性に対し，NUT 以外の教職員団体も次のように批判した。NHAT は，校長にも自らの学校の教授学習の質の水準を評価する専門的な責任があるのに OFSTED はそれを切り取っている，校長は教授・学習の質について教師評価や教室観察や教師との議論によって情報を得るものなので，OFSTED の視察からのフィードバックは校長が学校経営

していく上で重要な情報源であるのに，OFSTED は観察した授業についての情報を十分に校長と共有していないと述べ，NASUWT は OFSTED の教師評価のプロセスが授業の質の向上というより雇用の問題へと発展していることに不安を示し，ATL は，多くの教師が視察報告書やフィードバックのなさに対し文句を言えないでいるのは，視察結果を促進していくガイダンスや視察後のサポートについてのガイダンスが与えられていないからであると指摘している[16]。このような教職員団体の反応からは，OFSTED の判断のなすがままの状態にある学校と教師の状態が伺えるが，そのような状況の元，新たに浮かび上がってきたのが教師の覇気（teacher morale）喪失という問題である。NUT は1998年に，国立教育研究所（National Foundation for Educational Research, NFER）との共同研究で，451の失敗学校と482のそうでない学校とを比較し，学校に対する OFSTED のインパクトを調査したが，そこでは教師がいかに OFSTED の学校視察に対し落ち込んでいるかを示している。それによれば，教師は OFSTED の学校視察後に，「OFSTED 後の憂鬱（post-OFSTED blues）」状態に陥り覇気を失っており，特にそれは失敗学校では視察後に改善されたと答えた教師の２倍以上であった（58%）という[17]。覇気喪失の原因としては，(1)OFSTED の学校視察後に HMI, LEA, 学校それ自体によってモニターされること，(2)教師の非専門性や能力に対する自信喪失，(3)失敗学校という名前と恥辱，(4)限りない書類作業，が挙げられている[18]。

興味深いのは，この共同調査において，失敗学校は，視察後になされた特別措置のうち最も役立った重要な要素は「経営，リーダーシップ，チームワーク」であると述べているのみもかかわらず，それらが個々の教師の覇気の高揚には影響する要素として挙げられていないことである。このことは，失敗学校は学校視察によって組織的な高揚が促進されても，OFSTED も学校自体も一人一人の教師に対し継続的なサポートをするには至っていないことを示しているといえるであろう。このように，授業の質の向上や授業への動機付けを意図した Woodhead の期待とは逆に，OFSTED は教師のやる気を削ぐ方向へと一方では向かっていっているのである。

では，教師に直面しているこのような OFSTED の学校視察に対するインパクトに，教職員団体はどのような戦略ないしは要求を示しているのであろうか。

３．NUT の学校自己評価の枠組み

まず，NUT による学校評価に対する概念を振り返ってみる。NUT が1960年代からとっている立場は自己評価である（self-evaluation）。NUT は，1960年代から70年代にかけては，自己評価は，「研究者としての教師（teacher as researcher）」という言葉が示すように，教師の自己評価が専門的成長と授業の発展に貢献すると考えていたが，1980年代に市場原理が教育界に導入されてくると，アカウンタビリティと学校改善に貢献するメカニズムとしての学校自己評価という考えに転換してきた。そして，評価とは，行動に動機付けをさせるものであり，ある決定を援助するため情報収集をし，その決定過程が評価方法であると考え，自己評価はそのプロセスを重視し，学校自身の目的のために使われ，良い実践を広く共有しより広い体系的なアプローチへと統合できるものとしてい

る。OFSTED の学校視察のような外部評価との関係に関しては，自己評価は外部の基準に批判的に反応でき，両者の利点を考慮しながら，内的に引き出された基準とセットできる強力な形態であると考えている[19]。自己評価の基準の開発に関しては，NUT は1995年に学校種や地域性，生徒の成績等のバランスを考慮し，10校の校長・教頭・教師，生徒，親，学校理事会の各グループを対象に調査し，良い学校とは何かその基準を自由に記述させるとともに，OFSTED の基準に対しては優先順位をつけさせることを試みている。その結果，以下の10の自己評価の基準が提示された。(1)学校文化（学校が安全で楽しい場所か，生徒がクラス外の構成的な事象に関わっているか，生徒とスタッフがリラックスし秩序ある方法で行動しているか，生徒・親が学校への貢献に価値を置いているか，学校が訪問者や新参者を歓迎しているか），(2)関係（全てのスタッフがチームワークを共有しているか，上級生が下級生を援助しているか，いじめが許されていないか，人々が個々の価値を互いに主張しているか，親と学校理事会が学校内で歓迎され価値を置かれていると感じているか），(3)教室文化（生徒と教師にとって満足できる場所か，秩序，目的，リラックスした雰囲気があるか，生徒が協力しているか，個々の価値観が主張されているか，成功の可能性から子どもが排除されていないか），(4)学習へのサポート（生徒が自立的な学習者として自己を見ているか，教師が全ての生徒が学習し成功を得ていると信じているか，学校活動の主な焦点が効果的な学習生産と関連しているか，学校内外の学習が全体的に一貫しているか，生徒が進歩をレビューし，達成と目標設定を記録することに関わっているか，(5)教授へのサポート（教授学習へのサポートが学校の方針と計画の中心になっているか，教師が経営から効果的なサポートを得ているか，教室規模が全ての教師の効果的な教授を確実にしているか，教師が互いに成功と問題を共有しているか，親が生徒の学習を見ているか），(6)時間とリソース（クラス組織が生徒の効果的な学習に役立っているか，リソースの発展が交渉を共有した結果であるか，教師が計画・評価を専門的に発展させるよう時間がうまく使用されているか，リソースが学校内外で提供されているか，学校がコミュニティのリソースであるか），(7)組織とコミュニケーション（学校の決定がオープンなプロセスか，学校内の全ての価値観が聞かれているか，親と理事会が学校の方針や実践について情報提供されているか，生徒が彼らの関心や問題について議論する場を持っているか，コミュニティが学校の積極的な価値観をもっているか），(8)公平さ（生徒が平等の機会の方針において尊重されているか，文化・モラル・知的・社会的差異を学校，生活，学習の付加価値としてみているか，全てのスタッフが平等の機会の文化を促進する役割を果たしているか），(9)達成の認識（学校に達成の文化があるか，全ての生徒が達成を認識する平等な機会があるか，罰より賞賛が学校全体にアプローチされているか，何が成功かについて学校に共通理解があるか，スタッフの達成が認識され報酬が与えられているか），(10)家庭と学校との連携（親が子どもの学習に積極的な役割を果たしているか，親が問題が処理されフィードバックがなされていると信用しているか，学校は生徒の社会・文化・言語的背景に対し提供しているか，親と教師の会議が役に立ち生産的か，生徒の進歩がモニターされ親と共有されているか）[20]。

OFSTED の授業評価は，教師の教科内容の理解度，教師の生徒への期待度，教師による質問・観察・評価・説明の仕方，授業計画や生徒の学習評価，生徒の指導方法，時間とリソースの使い方，

宿題の設定の仕方など，教師自身の授業能力査定に対し詳細に基準を設け，視察官による「1.優れている」から「7.大変劣っている」までの評点制を使用しているが，NUT は上記の自己評価を実施する上では，(1)「批判的友人（critical friend)」として，生徒・親のニーズに合わせた基準を設定し，親，生徒等グループ別に評価させること，(2)点数形式よりも記述形式の評価を取り入れることを示唆しており，各基準には利用されるべき量的・質的データの種類を挙げているだけで，教授へのサポートにしても，判断の数値的な基準を設けていない。このように，NUT は OFSTED とは異なる方法で学校自己評価基準と判断設定のアプローチを試みている。

1999年にも NUT は同様な自己評価基準を提示し，OFSTED の授業評価方法が日々の教師の実践を全く無視し，視察日の授業だけで評価していることへ不満を露にしている[21]。OFSTED の学校視察前に学校側は様々な学校のデータを提出するが，その中に教師の授業実践についてのデータを提出しても，視察当日の授業評価で教師の質が決定されてしまうということは，それらの書類も無視されていることに等しいというのである。NUT が望むことは，日々の継続された学校や教師の取り組みや実践が長所として視察に考慮に入れられることである。それは個々の教師が自ら授業評価に参加しているという態度の育成につながると考えている。そのためにも，学校自己評価は必要であるとし，最終的には，自己評価と外部評価の共同的（collaborative）な評価基準の設定に貢献すると考えているのである。

しかし，そのような教師，学校，教職員団体の反応に対し，1997年に交代した NUT の支持政党である労働党政権は NUT との同意的なアプローチもないまま，ついに新しい OFSTED の視察枠組みを1999年に導入した。それは，自己視察（self-inspection）というものである。次はその特徴について考察してみる。

4．OFSTED の学校自己視察の特徴

労働党政権下の OFSTED は，学校自己評価についてまず，「学校が自身を知り理解することは学校がもっている問題を解決する方法においてよいことである。スタッフや他者との間で自身の仕事を批判的に評価することにコミットメントする能力は学校がいかにうまく経営されるかの重要な検証である（中略）効果的な変化と自己評価は開放と協議を特徴とする。自己評価は改善のために何を優先するかを明確にし，提供されている教育をモニターし，結果を評価する継続的なプロセスを伴い，視察を補う」[22]と自己評価の意義を認める一方，「外部評価も自己評価も学校の質と水準を明確に評定することに関心がある（中略）自己評価は水準に最大のインパクトを与えることを明確にせよ（中略）学校の生徒の学力を客観的に観察し，学習のサポートをするために何を与えればいいかを考える前に学校の長所短所を明確にし学校の成果を考慮せよ」[23]というように，自己評価が水準向上に寄与しなければならないという明確な目的を強調している。水準の評価の指標としては，学力のデータがベースであり，テスト成績の分析，学力目標を達成している生徒の把握，他の学校との水準の比較，水準に対する学校理事会の態度のレビューから始めるようにと示唆し，そのため

には，視察前に全国の学力と評価の報告書（Perfomance and Assesment Report，PANDA）を参考にするようにと，視察前に行う学校自己評価の枠組みにおいて学力を指標にするように方向付けている。授業評価に関しては，OFSTED のハンドブックの基準が「国家基準」であるとしている[24]。このように，OFSTED は，学校自己評価においても，使用する基準とデータを指定し，その枠組みを自己視察という形式で導入してきた。その意図は，「学校自己評価は，視察官によって全ての学校において使用されるのと同じ基準を使用することに利点がある。共通の言語は，基準を通して表現される学校の作業を発展させる」，「自己評価の方法に関しては OFSTED のハンドブックが効果的に役に立つ」というように，自己評価の基準を同じにしながら，最終的には，「視察が，定期的なモニター及び評価として優先事項が明確になるプロセスを補うのである」と，自己評価よりも視察の方の優位を明らかにしているのである[25]。

この学校自己視察の導入に対し，NUT の学校自己評価の支援者 MacBeath は自己評価と自己視察には明確な違いがあるとし，その特徴の違いを分析しているが（表１），そこからは，自己視察が外部から方向付けられた制限的なものであることが明確である。

表１　学校自己評価と学校自己視察の方法の特徴[26]

自　己　評　価	自　己　視　察
・教師が外部の見解に頼らない手段。	・外部の見解を学校に取り入れる。
・学校が自身を知り，自身の方法でその物語話すのを援助する。	・学校が他者が学校を見るように自身を見れるようにする。
・学校によって柔軟に使われる。処方箋的ではない。	・自己視察の内容は大きく事前に予定される。
・変化への挑戦が内部から生じる。	・全ての学校によって完成されることが要求できる。締め切りが設定できる。全国的・地方的イニシアチブを考慮にできる
・価値ある経営道具として主張される。外部視察を補助する。	・OFSTED の視察の固有の要素。外部視察の機能を引き継ぐ。
・模倣が困難。結果は説明を要する。	・模倣され評価される。基準は既に慣れている。
・学校は他の基準設定に調和しなければならない。	・同じ基準が使われる。
・自己評価システムはしばしば時間を取り負担になる。	・自己視察は制限された目的をもち比較的単純。
・アカウンタビリティと自己改善が単一の内的関係にある戦略としてみなされる。	・視察のアカウンタビリティと改善機能が分離できる。

更に，Ferfuson らは，学校自己視察の基準は，OFSTED の基準を使用しない多様な自己評価の方法からの評価プロセスを区別しようとするために使われているのであり，他の基準との協力をむしろ困難にすると懸念している[27]。

このように，OFSTED は，共通の基準を使用することによって学校自己評価と学校視察という

外部評価の融合を意図したというよりは，視察前に参考にするデータや自己評価基準まで指定した学校自己視察という枠組みを学校視察の枠組みに含めることによって，むしろ学校視察の正当性をより促進しようとしていると考えられるのである。

おわりに

以上のように，本論では OFSTED の学校視察や学校自己評価を含む学校評価における教職員団体，特に NUT の反応を中心に見てきたが，その反応からは，OFSTED の学校視察において失敗学校とそうでない学校との反応に差が生じ，失敗学校の教師の覇気低下が見られることがわかった。又，学校評価については，NUT は学校自己評価策を模索していること，OFSTED は学校自己視察制度を取り入れ，益々 OFSTED の学校視察の圧力が増していくことが予想されるとことが明らかになった。このような重層構造的な学校評価制度下におかれている NUT の立場は決して安定したものとは言えないであろう。それは，NUT の報告書にも表れているように，「失敗学校」・「失敗教師」とそうでない学校，教師との間で OFSTED に対する反応に差が生じているように，学校間・教師間の分裂が NUT の方針や戦略に対しても影響を与えかねないからである。また，NUT が支持する労働党が政権をとっている現在，NUT の客観的な立場が明示しにくい状況にあるとも考えられる。今，OFSTED の学校視察によって生じている大きな問題は，統一基準の学校視察が益々独占的になり，学校のそれぞれの違いが考慮されない可能性と個々の教師へのサポートのなさである。その点，NUT は学校自己評価の基準で学校文化の評価を第一位におき，学校に関わる者全てを含む評価方法のあり方を推進しようとしている。OFSTED が全ての消費者の利益を考慮する一方で，NUT の考える学校自己評価は，学校が自身を取り巻く現状を把握し，学校に直接関わる者全てのニーズにこたえるための責任手段である。以前，学校や教師にとっては HMI が「批判的な友人」であったが，OFSTED がその代理になっているとはいえない現在，NUT は学校自己評価の戦略を通して親や生徒や学校理事会といった新たな「批判的な友人」を作り出すとともに，個々の教師に対する学校自体のサポート力も高めていかねばならいだろう。そのためにも，学校自己評価の実証的な研究を進め，OFSTED の学校視察に対する客観的な「批判的な友人」にならねばならないといえるのである。

註

（1） Guardian 2000. 4. 7.

（2） Fits, J. & Lee, John, in Ouston, J., Earley, P. & Filder, B. (eds)., 'OFSTED Inspecitons — The Early Experiences', David Fulton Publishers, 1996, p.11.

（3） NUT, 'Primary Questions: The NUT Response to the HMI Primary Survey, Hamilton The College Hill Press, 1979, p.4.

(4) ibid. 1979, p.4.

(5) ibid, 1979, p.36.

(6) ibid, 1979, p.36.

(7) Williamson, G., 'Leaves from the Inspectors Snapshot Album-reflections on HMI surveys of first and middle school' in "Education", 3-13, Vol 14 No.1 Spring 1986, p.14.

(8) Elliott, J. & Ebbutt, D., 'How Do Her Majesty's Inspectors Judge Education Quality?', in "Curriculum", Vol 7, No.3 Winter, 1986, p.130.

(9) Paul, B., 'An Inspector Called' in "Report", September, Association of Teacher and Lecturer, 1993, p,7.

(10) NUT, 'Teachers' and Headteachers' View of the New School Inspection Arrangement', 1994, p.3-6. この報告書は校長91名，NUT 所属教員86名を調査対象にしている。

(11) ibid., 1994, p.3.

(12) NUT, 'The Teacher', April/May 1995, p.11. NUT は OFSTED の学校視察を支持する理由として (1)視察が経営的，(2)授業と生徒の学力の重要な問題に対する鋭い判断，(3)学校の長所，短所，優先事項に大きな配慮がなされていることを挙げている。

(13) NUT, 'OFSTED — The View of Headteacher and Deputy Headteacher Members of the National Union of Teachers' 1998, P.4.

(14) Grubb, W. N., 'Improvement or contorol? A US view of English inspection' in Cullingford, C. (ed.), 'An Inspector Calls-Ofsted and its effect on school standards', Kogan page, 1999, p.83.

(15) OFSTED, 'Ofsted and its critics', 1996, p.2.

(16) General Secretary of NASUWT, NUT&ATL, 'Divisions Deepen over naming bad teachers' in 'Managing Schools Today', May 1996, p.4.

(17) National Foundation for Educational Research,'The Impact of OFSTED Inspections', 1999, p.48. この報告書は失敗学校の教師1160名とそうでない学校の教師220名が対象。

(18) ibid. 1999, p.81. 失敗学校は，OFSTED の学校視察後に HMI と LEA からも継続的に視察を受けることになっている。

(19) MacBeath, J. (eds), 'Schools Speak for Themselves-towards a framework for self-evaluation', College Hill Press, 1995, p.9-11.

(20) ibid, 1995, p.95-123. この枠組みの抽出に関しては，10校638名の学校関係者を対象に調査している。

(21) MacBeath, J. 'Schools Must Speak Themselves — The Case for School Self-Evaluation', Routledge, 1999, p.1.

(22) OFSTED, 'Handbook for Inspecting, Primary and Nursery Schools with guidance on self-evaluation' 1999, p.138.

(23) ibid. p.137.

(24) ibid. p.141.

(25) ibid. p.143

(26) Ferfuson, N., Earley, P., Fidler, B. & Ouston, J., 'Improving Schools and Inspection — The Self-Inspecting School — ', Paul Chapman Publishing, 2000. p.132.

(27) ibid. p.133.

坂　本　真由美

The Role of Teacher's Organisation under the School Evaluation System in England and Wales

Mayumi Sakamoto

The purpose of this paper is twofold. Firstly it is to examine the response to school inspection conducted by teacher's organisations, especially by the National Union of Teachers (NUT), thereby receiving to its rsearch reports. Secondly it aims to give consideration to the role of such an organisationunder the school evaluation system, hereby including school-self evaluation and school inspection.

In 1992 a new school inspection system by the Office for Standard in Education (OFSTED) was introduced to England. Before this system, the school inspection had been conducted by Her Majesty's Inspector (HMI). Teacher's organisations had evaluated this system as helpful and important for developing teachers' professional motivation. The response to OFSTED school inspection by NUT, however, is very negative. It seems that schools and teachers are being divided into 'good' and 'failed' by the OFSTED inspection, especially by the classroom observation under the OFSTED's limited framework, which has had a big impact. Not only the teachers labeled as 'failed' are gradually losing their self confidence and professional motivation. NUT emphasises school self-evaluation as a strategy against OFSTED's dominant school inspection in order to consider differences betweene schools and to encourage teacher's professional motivation. It's framework respects school own specific circumstances and its indicators are generated and developed by people directly involved, such as pupils, students, teachers, parents, and govenors. But OFSTED has introduced its framework of self-school inspection in 1999 and is trying to make schools use this self-school inspection criteria as their school self-evaluationcriteria. This will make it impossible for schools to use their own self-evaluation criteria and gives OFSTED's inspection system more and more authority.

The role of teacher's organisatoins is to continue the empirical research for school self-evaluation to ensure its effect for school improvement and to support teachers who are facing problems in their job. Moreover, it is to continue developing and examining a school self-evaluation framework which is useful to examine OFSTED inspection objectively.